

様 式 C - 1 9、F - 1 9 - 1、Z - 1 9（共通）

科学研究費助成事業 研究成果報告書



令和 6 年 6 月 1 0 日現在

機関番号：30103

研究種目：若手研究

研究期間：2020～2023

課題番号：20K13009

研究課題名（和文）アイヌ語鶴川方言のフィールド調査およびデータの公開

研究課題名（英文）Field Research and Data Publication of the Mukawa Dialect of Ainu

研究代表者

岸本 宜久（Kishimoto, Yoshihisa）

札幌学院大学・経済経営学部・講師

研究者番号：20848600

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,800,000 円

研究成果の概要（和文）：言語調査を目的としたアイヌ語のフィールドワークを継続的に実施した。また、フィールドワークで得られた言語資料のデータベースを構築するためにデータ整理を行った。とくに、音声資料はAI（AWS）での文字起こし処理を行ったうえで、日本語とアイヌ語の修正・書き直し作業を実行した。データ整理の一連の過程については、デジタル・ヒューマニティーズの観点から3件の発表を行った。また、アイヌ語鶴川方言の談話テキスト資料を発表し、言語特徴の記述を行った。年度内にデータベースの公開には至らなかったが、テキスト資料の公開とあわせて今後も課題として取り組んでいきたい。

研究成果の学術的意義や社会的意義

現在、アイヌ語の継承語話者はアイヌ語と日本語のバイリンガルであり、多くの場合、第一言語は日本語である。そのような環境において獲得されたアイヌ語に着目した記述研究や資料の公開は数少ない。本研究は、大正時代以降に生まれた若い世代のアイヌ語継承語話者の言語を記録・記述し資料を公開することで、アイヌ語の世代間の特徴や変容をとらえていくことに寄与するものである。また、アイヌ語や伝統的な風習が家庭や地域から失われつつあった時期（昭和前期）の詳細な社会状況や文化風習の情報は、言語学のみならず社会学、文化人類学などの領域においても貴重なデータである。

研究成果の概要（英文）：I have been continuously conducting fieldwork aimed at investigating the Ainu language. Additionally, I organized data to build a database of linguistic materials obtained during fieldwork. In particular, the audio materials underwent transcription processing using AI services, followed by correction and rewriting of Japanese and Ainu language. The process of data organization was presented in three papers from the perspective of digital humanities. I also presented discourse and text materials of the Mukawa dialect of Ainu and described its linguistic features. Although the database was not publicly released within the fiscal year, I plan to continue working on it alongside the publication of the text materials.

研究分野：言語学 記述言語学 アイヌ語

キーワード：アイヌ語 危機言語 記述言語学 言語ドキュメンテーション

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

アイヌ語は、国内における極めて深刻な危機言語のひとつである。明治期以降、急激に継承が途絶えはじめ、それに伴って研究者やアイヌ民族自身の手によってアイヌ語に関する様々な記録が残されてきた。なかでも口承文芸の伝承、記録・保存は積極的におこなわれ、現在、公刊・公開されている資料は口承文芸のテキストが中心である。一方で、アイヌ語の口語による自由談話や文例の公開は限られている。

本研究が対象としているアイヌ語鶴川方言は、周辺の沙流方言や千歳方言(体系的な記述や資料が比較的多く公刊・公開されている方言)と異なり、総合的な言語記述は少ない。また、沙流方言・千歳方言とは語彙的・文法的な差異がある可能性も指摘されている(遠藤, 2014)。アイヌ語はすべての方言が深刻な危機言語であり、各方言の総合的な記述の可能性は調査記録の多寡に左右される。アイヌ語鶴川方言はこれまでに語彙や歌謡、口承文芸のテキストなどが公刊・公開されている。近年では、映像作家の片山龍峯氏によって採録された鶴川方言の語彙および用例の音声つき資料が公開され、学術研究においても言語復興への活用においても極めて貴重なオンラインデータベースのひとつとなっている(千葉大学人文公共学府地域研究センター)。ただし、当該資料は言語学的な調査・目的に基づくものではなく、アイヌ語鶴川方言の復興活動の一環として辞書の作成を目的に採録されたものであり、収録前の話者との打ち合わせや、ときには調査者が期待する形式への過剰修正など、資料の性格上、留意すべき点も指摘されている(中川, 2014)。

これらの資料は、鶴川方言を体系的に捉えていくうえで極めて重要な資料である。しかし、その目的は必ずしも言語学的な記述・分析ではなく文化的な記録や教材の開発などであったため、詳細な意味的特徴、用法などは未詳の点も多い。研究代表者の記述言語学的フィールドワークによって記録された語彙や文例、自由談話などの多様な言語資料の公開は、これまで語彙・口承文芸テキストを中心として公開されてきた鶴川方言の資料とあわせて同方言へのアクセス性を高め、学術的な貢献のみならず次世代への言語・文化知識の伝承に貢献するものとなる。

<引用文献>

遠藤志保(2014)「アイヌ語鶴川方言の疑問表現」『千葉大学ユーラシア言語文化論集』(16). 163-181.

千葉大学人文公共学府地域研究センター「アイヌ語鶴川方言：日本語 - アイヌ語辞典」
<https://www.gshpa.chiba-u.jp/cas/Ainu-archives/index.html> (2024年6月10日閲覧)。

中川裕(2014)「特集：片山龍峯氏採録アイヌ語鶴川方言音声資料 同資料について」『千葉大学ユーラシア言語文化論集』(16). 153-162.

2. 研究の目的

本研究の目的は、以下の2点である。

- a. アイヌ語鶴川方言の言語学的フィールドワークの実施および体系的記述
- b. アイヌ語鶴川方言のフィールドワークで得られたデータの整理・公開

これまで鶴川方言は、語彙や一部の口承文芸が公刊・公開されてきたが、体系的な言語記述はみられない。むしろ、公開されている資料が比較的多い方言にもかかわらず、詳細な言語記述が存在しない点は、学術的なアクセス性においても言語の復興に向けた活動・教育への活用においても望ましい状態ではない。危機言語として、いずれの方言においても継承語話者へのアクセスが困難な状況にあるなか、直接的な調査によって新たな発見や情報を得られる可能性が残されていることは、極めて貴重であり、最大限、機会を活かす必要がある。

本研究の調査協力者であるアイヌ語の継承語話者(1926年生まれ)は、アイヌ語と日本語のバイリンガルである。半生においては日本語での生活が圧倒的に長いことから、第一言語は日本語といえるが、幼少期に家庭内や地域のなかでアイヌ語を継承した。大正時代以降に生まれた比較的若い世代の継承語話者が語るアイヌ語の記述研究および資料公開は少なく、その実態が明らかではない点も多い。継承語話者のアイヌ語としての言語記述・資料公開は、他の世代のアイヌ語の記述と同様に学術的に重要なテーマと考える。研究代表者による鶴川方言の記述は一方言の体系を示すばかりではなく、急激に衰退したことによるアイヌ語の世代間の特徴についても明らかにするものである。また、アイヌ語や伝統的な風習が家庭や地域から失われつつあった時期(昭和前期)の詳細な社会状況や文化風習の情報は、言語学のみならず社会学、文化人類学などの領域においても貴重なデータであり、それらの公開も目的としている。

3. 研究の方法

- a. アイヌ語鶴川方言の言語学的フィールドワークの実施

研究代表者は2012年からアイヌ語鶴川方言のフィールドワークに従事している。調査の目的は鶴川方言の言語学的記述であり、これまでにエリシテーション(写真や動画による誘出も含む)による語彙・短文や自由談話のデータおよび同地域の歴史的、文化的な情報を記録している。大正15年生まれでアイヌ語の継承語話者である調査協力者には2020年1月までに177回の聞き取り調査を実施し、録音・録画データは1,200時間を超えている。2020年2月以降は、新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止にともなう移動および活動の自粛により調査を中断せざるを得ず、再度の調査の機会を得られないまま調査協力者が他界された。2023年4月より昭和前期に鶴川地域で生まれ育った複数の調査協力者と新たに出会うことができ、2024年3月までに12回の聞き取り調査を実施し、アイヌ語の語彙調査および鶴川地域のアイヌ民族、アイヌ文化に关する歴史的、文化的な情報を含む聞き取り調査を継続している。

なお、記録に際しては調査協力者の同意のもとICレコーダーによる録音とデジタルビデオカメラによる映像記録を保存している。

b. アイヌ語鶴川方言のフィールドワークで得られたデータの整理

アイヌ語鶴川方言のフィールドワークデータのデータベース化に向けた整理作業の一環として、AI文字起こしによって生成された字幕テキストの修正およびフィールドノートの文字起こしを進めている。2021年度には、Amazon Web Service(AWS)を利用したAI文字起こし処理を行い、総収録時間約1,200時間の音声データに対する基礎的な字幕テキストの生成を行った。生成された字幕テキストは、字幕エディターを使用しての日本語テキストの修正およびアイヌ語の書き直し作業が必要となる。それとあわせて、データベース化に向けたテキストへのマークアップ作業を進めている。また、フィールドワーク時に記録したノートについても電子化と内容の活字化を進めている。

4. 研究成果

AWSによるAI文字起こし処理を行った音声ファイルのうち、最終年度までに調査ファイルの約3分の2にあたる100回分の字幕テキストのファイルについて日本語とアイヌ語の修正・書き直し作業を実行した。これらの基礎資料整理におけるAI技術(クラウドサービス)の検討・活用は、研究手段として低いハードルで高効率のデータ処理を行う実践のひとつとしてデジタル・ヒューマニティーズの観点から3件の発表を行った。

また、修正・書き直し作業を行ったデータの範囲から、アイヌ語鶴川方言での談話テキスト資料を発表した(岸本, 2024)。同資料は2014年の第54回調査と2015年の第89回調査において採録したもので、話者がそれぞれ同じ経験談を語ったものであるが、両者の間では語彙使用のみならず文法的な表現の使用にも相違がみられた。たとえば、2014年のテキストにおいては受動態の表現が積極的に現れないのに対し、2015年のテキストでは「a=en=ye(言われる <a=4.A, en=1.SG.O, ye 言う)」や「a=en=kopasrota(叱られる <4.A=1SG.O=叱りつける)」など、受動態の表現が複数個所で現れている。また、2014年のテキストでは日本語を語ったうえでアイヌ語に言い直す箇所が散見されるが、2015年のテキストではその頻度が下がっている。ところどころ日本語へのコードスイッチングはみられるが、2014年調査と2015年調査の約1年の間にもアイヌ語産出の再活性化がうかがえる例をテキストの比較から示すことができた。2010年代以降に採録された日本語を第一言語とするアイヌ語の継承語話者の談話テキストは、アイヌ語のすべての方言において記述・公開されているものが限られている。アイヌ語の継承語話者の言語体系を記述していくうえで学術的に重要な資料といえる。今後も積極的にテキスト資料の公開を続けたい。

当初は、フィールドデータのデータベースの公開までを目標としていたが、数年に及ぶコロナ禍で予定していた調査の中断や作業エフォートの予期せぬ見直しをせざるを得ない状況もあり、AI文字起こし後の日本語とアイヌ語の修正・書き直し作業の進捗が遅延してしまった。最終年度までにおおよそデータベースの整備は進められたものの公開には至らなかった。本研究で整理したフィールドデータのデータベース公開は言語研究においても、また、言語復興にかかる活動においても多分に寄与するものである。最終年度までに公開できなかった点はすべて研究代表者の研究計画および遂行の責めに帰すが、今後も公開に向けてデータの整理と記述研究を継続していく。

<引用文献>

岸本宜久(2024)『アイヌ語鶴川方言テキスト(1): 火の玉を見て気を失った話』『北方言語研究』14. 251-270.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 岸本宜久	4. 巻 14
2. 論文標題 アイヌ語鶴川方言テキスト（1）：火の玉を見て気を失った話	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 北方言語研究	6. 最初と最後の頁 251-270
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 岸本宜久，劉冠偉
2. 発表標題 AI文字起こしを活用したフィールドデータの基礎処理 - アイヌ語調査の日本語談話を例に -
3. 学会等名 DHフェス2022
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 岸本宜久，劉冠偉
2. 発表標題 フィールドデータへのAI文字起こしの活用による基礎資料作成の効率化
3. 学会等名 第114回札幌学院大学言語学談話会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 岸本宜久
2. 発表標題 アイヌ語のフィールド記録の整理と公開
3. 学会等名 言語学フェス2021
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------